

資源管理に必要な情報の提供事業－I

漁海況予報関連調査

久野正博・藤田弘一・山田浩且・沖 大樹

目 的

本県沿岸の漁況および海況の調査研究を行い、漁海況情報を迅速に漁業関係者に提供すると共に、その情報を解析して漁海況予報を行い、漁業資源の合理的利用と漁業操業の効率化を図り、漁業経営の安定化に資する。

方 法

熊野灘19測点および伊勢湾16測点において、毎月1回の海況調査を調査船「あさま」で行った。漁況は主要漁業協同組合から統計資料の入手および電話による聞き取りによって収集した。収集した漁況・海況データは取りまとめて解析し、漁海況速報として毎週1回発行した。

結果の概要

詳細については平成17年度漁況海況予報関係事業結果報告書（漁海況データ集）で報告したので、以下は概要を記す。なお、漁況については「資源評価調査」で報告した。

黒潮流路は、2004年7月後半から続いていたA型が蛇行域を徐々に東へ移動させて2005年6月後半にC型へ移行した。7月～9月はC型で経過し、10月上旬～中旬に一時的なD型を経て、10月下旬にN型となった。その後は年度末までN型基調で推移し、特に12月上旬～2月中旬は流路変化の少ない安定したN型が持続した。

潮岬沖の黒潮は、A型期間の4月～6月前半は黒潮北縁までの離岸距離が30～50マヰ程度で離岸した状態が継続したものの、離岸規模は徐々に縮小し、8月は10マヰ程度まで接岸、9月には接岸するようになった。9月以降は潮岬に黒潮が接岸した状態が続き、年度末まで大きく離岸することはなかった。大王埼沖では、4月～5月は黒潮北縁までの離岸距離が100～150マヰ程度の大きく離岸した状態が継続したものの、離岸規模は徐々に縮小し、6月～8月は50～100マイル程度の離岸となり、9月以降は50マヰ程度の安定した状態が継続した。

熊野灘沿岸の水温は、2004年夏以降の黒潮大蛇行による高水温傾向が2005年4月にはほぼ解消し、表層では平年並みとなった。4月は黒潮から切離した小暖水渦の影響で100～200mで平年を1～2℃上回ったが、5月以降は100～200mの高水温も解消して平年並みとなった。表層では9月にかけて平年並み～やや低めで経過し、100～200mでも徐々に平年を下回るようになった。10月～11月には、表層は平年並み～やや高めとなったが、100m以深では平年を大きく下回り、低水温が顕著となった。12月には表層を含めて平年より低めとなり、2006年1月～3月は表層を中心に記録的な低水温となった。特に2月～3月は、熊野灘全域の表層水温が平年より2～4℃前後低めの12～13℃まで低下し、3月の表面～50mでは、年間を通して観測史上（1966年～）最低の水温を記録した測点も多かった。

浜島の定地水温は、前年からの高水温傾向は3月にはほぼ解消し、4月以降は平年並み～やや高め基調で経過した。6月下旬に高め、7月下旬および8月下旬～9月上旬に低めとなった他は平年よりやや高い状態が10月上旬まで続いた。10月中旬～12月上旬はほぼ平年並みで経過し、12月中旬に一気に降温した。12月下旬～1月上旬は平年値を2℃程度も下回る低水温が続いた。2月中旬に一時的に平年並みとなったものの、3月下旬まで平年より低め基調が継続した。

伊勢湾の水温は、4月～5月は平年より高め基調、6月～8月は表面では高め基調、中層以深では平年より低めとなった。9月は表面を含めて平年よりやや低めとなったが、10月～11月は全層で高水温傾向となった。12月には気温の低下と共に降温が進み、3月初旬にかけて低水温が顕著となった。12月～2月の浅海定線観測では観測史上（1972年～）で2～5番目に低い水温を記録した。

底層における貧酸素水塊（DO2ppm以下）は、6月～11月に確認された。6月の貧酸素水塊の面積は平年より大きく、その後11月まで平年並み～やや広い面積で分布していた。その形状は湾奥から三重県側に偏って分布していることが多かった。

白子の定地水温は、4月～6月は平年並み～高め、7

月上旬～9月上旬は平年並み～やや低め、9月中旬～11月中旬は高め基調で経過し、11月下旬に平年並みとなった。12月に降温が進み、12月中旬には平年を2～3℃前後も下回った。12月下旬～2月上旬は平年より低め、2月中旬以降も年度末まで平年並み～低め基調で経過した。

関連報文

三重県(2006)：平成17年度漁況海況予報関係事業結果報告書（漁海況データ集）